

令和元年度Ⅱ期 グループ企画2

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	N. A	National Yang-ming University, Taiwan (国立陽明大学)	台湾	R1/12/21-R1/12/27
2	S. K			R1/12/21-R1/12/26
3	K. K			R1/12/21-R1/12/27
4	O. R			
5	T. M			
6	N. K			
7	Y. G			
8	M. Y			

2019 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 2 年

学籍番号 *****

氏名 N・A

以下では、表紙に記載した「3.今回の海外活動により得られた成果、感想等」について報告します。

1：スケジュール

詳細な活動内容については第 3 項「活動内容」で記述します。

2019/12/21 関西国際空港発、台湾国際桃園空港着、welcome party

12/22 文化研修（瑞芳老街、猫村、金瓜石鉱山、九份）

12/23 研究所見学(脳神経、免疫学)、文化研修（龍山寺、西門町、象山）

12/24 Taiwan Blood and Marrow Transplant Care Association の NGO 活動、

カルチャーナイト

12/25 国立陽明大学附属病院見学、文化研修（足湯、夜市）

12/26 東洋医学の講義、文化研修（鶯歌陶器街、湯円作り）

12/27 ディスカッション、farewell party、台湾国際桃園空港発、関西国際空港
着

2：目的

まず、台湾の医学生や医師と接することで、友好関係を深め、そして国際感覚を養うことです。また、病院見学や研究室見学といったアカデミックな活動を通じて台湾の医療や文化を知り、そしてそれを日本のものと比較することです。さらに交流を通じて台湾の医学生にも、日本の医療や文化を知ってもらうことです。

最後に大阪大学と國立陽明大学との交換留学の歴史を引き継ぐことで、この2校の友好関係の発展にも貢献することです。

3：活動内容

プログラムの概要

このプログラムは AMSA(Asian Medical Students' Association)という国際的な医学生の団体の主催する AMSEP(Asian Medical Students' Program)という、

アジアの医学生同士の交換留学の一環です。

今回私たちは12月21日から12月27日の1週間、台湾の國立陽明大学に留学しました。そこで、研究室訪問、病院見学、講義の受講、現地の医学生とのディスカッションや台湾の文化施設の見学を行いました。なお、2020年2月10日から2月16日までの期間で私たちが國立陽明大学の医学生を受け入れます。

プログラムの詳細

① 研究室見学（12月23日）

國立陽明大学神経科学研究所では、脳神経とドーパミン報酬系の研究をしているラボを訪問しました。研究の内容はちょうど2年次の前期の生理学で習った内容だったので、英語での説明でも理解することができました。

また、授業で習った実験を実際に自分の目で確かめることができ、より一層理解が深まりました。一番驚いたことは、授業で北澤先生が説明してくださった実験と今回見学した実験の着眼点や手法がかなり酷似していたことです。医療や技術に国境はないということを強く実感しました。

② 研究室訪問 2 (12月23日)

Institute of Clinical Medicine Lab を訪問しました。ここではスライドを用いての免疫学の講義を受けました。免疫学は未習範囲であったため、英語での説明には苦戦しました。会話であれば、分かる単語から相手の伝えたいことを推測することはできますが、やはり専門的な内容になるとそもそも日本語で専門用語を知っていないと推測さえもできない、ということを実感しました。専門用語を日本語でも英語でも学び続けることの必要性を改めて感じました。

③ Taiwan Blood and Marrow Transplant Care Association の NGO 活動への参加 (12月24日)

この団体は、骨髄移植を受けて無事に完治された人々が、できるだけ多くの人が骨髄移植を受けられるようにしたいという思いから結成した団体です。私たちがこの NGO 活動に参加した日はクリスマスイブだったので、サンタやトナカイに扮して患者さんにお菓子をあげ、クリスマスソングを

歌い、元気付けるということをしました。多くの患者さんは私たちを笑顔で迎え入れてくれ、楽しそうに歌を歌ってくださったので、むしろ私たちの方が元気付けられました。ただ、中には病室には入らないで欲しいという患者さんやそのご家族もいらっしゃいました。病気で苦しんでいるのに呑気に歌を歌ったりお菓子を食べたりしている様子を見るのがしんどい、という気持ちはすごく理解できるものでした。元気付けたいけれどあまり話しかけると余計に気を使わせてしまう、これは将来自分が医師になった時にも直面する問題だろうと感じました。

④ 国立陽明大学附属病院の見学

台東にある大学附属病院を見学しました。台湾では日本と同じように高齢化が進んでおり、年金問題や医療問題が深刻化していると、事前学習で学んでいました。この病院がある地域は台湾の中でも特に高齢化が進んでおり、病院にさえ来られないという患者さんが増えているそうです。そこでこの大学病院が取った策は訪問看護をすることで、毎日医師が様々な家庭を訪問し、治療をすることだそうです。また、医師がいない時でも簡単な



処置ができるように、患者さんのご家族の方に普段のケアの仕方も説明するそうです。こういった訪問看護は日本でも同じようになされていると思いますが、台湾が将来もっと高齢化が進み、高齢者が増え医師の数が相対的に減った時でも続けられる制度なのかどうか気になりました。台湾よりも高齢化が進んでいる日本ではどのように対応しているのか調べ、2月の受け入れ時にこの話題について台湾の医学生と議論ができればいいなと思いました。

⑤ 東洋医学の講義（26日）

鍼治療のスペシャリストによる、東洋医学の講義を受講しました。今大学で学んでいる西洋医学とは考え方が全く異なっており、「気」といった興味深い内容も多くありました。特に興味深かったのは性格診断です。先生が生徒の腕の脈拍を測っただけで、その血圧や脈拍数からその人の性格がわかるといったものでした。性格というのは脳で決められているとばかり思っていたので、今だに信じがたいものですが、私の性格を言い当てられたのでやはり「気」は存在するのかわからず思わざるを得なくなりました。将来グローバル化が進み、日本の病院にももっと多くの外国人の患者さんが訪れるようになるかもしれません。その中には私たち日本人とは異なった宗教心理、医学心理を信じている方もいるかもしれません。今回学んだ東洋医学のように、西洋医学とは異なる医学知識も学んでおく必要があると思いました。

⑥ パネルディスカッション（PBL）（27日）

台湾の医学生を交えて、医学的な議題についてパネルディスカッションを

しました。台湾ではこの PBL を授業内でもするようで、皆の前で発言することに対して躊躇がないように感じました。日本では一方的に授業を聞いていることが多く、発言する機会がやはり少ないのではないかと改めて感じました。また、英語で医学的な内容について発言するにはやはり専門用語の英語が知っていなければならず、医学英語の必要性を感じました。

⑦ 文化研修（21日～26日）

陽明大学の医学生に様々な台湾の名所を案内してもらいました。各地の歴史や観光の仕方などを、現地の方ならではの視点から説明してもらいました。このような経験は個人の旅行ではできない貴重な経験だと思いました。

4：成果

今回の交換留学の最大の成果は、台湾の医学生と交友関係を築けたことである。同じ医学を学ぶ同世代の人々と共に過ごしたことで、お互いの国の医療事情について議論でき、お互いの国の文化について知ることができました。グロ

ーバル化が進む社会において、将来医師として活躍するための礎の一部を築く
ことができたのではないかと感じています。

5：最後に

この留学は今まで AMSA を続けてくださった先輩方や、阪大の先生方、台湾の先生方、台湾の医学生たちの協力なしでは実現しませんでした。また、金銭面では岸本先生のおかげで、学生でありながら海外の病院を見学するなどといった貴重な経験をさせていただくことができました。この場を借りて感謝申し上げます。2月には今回私たちを受け入れてくれた台湾の医学生が日本に来ます。その時には今回の感謝の気持ちを、私たちなりのおもてなしで精一杯表現しようと思っています。今後も多くの国や地域の人々と交流し、広い視野を持った人間になれるよう努力し続けていこうと思っています。

令和元年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 3年

学籍番号 *****

氏名 S・K

以下では、表紙に記載した「4. 今回の海外活動により得られた成果・感想等」について報告します。

1. スケジュール

詳細な活動内容については第2項「活動内容」で記述します。

2019年12月21日 関西国際空港発、台湾桃園国際空港着
12月22日 文化研修（瑞芳老街、金瓜石鉱山、九份）
12月23日 研究室訪問，龍山寺，西門町
12月24日 病院訪問（チャリティ参加），文化交流
12月25日 病院訪問，北投温泉，
12月26日 東洋医学講義，台湾桃園国際空港発，関西国際空港着

2. 目的

まず，第一に台湾の医学生と交流し，国際感覚を養う。また，台湾の医療や医療教育を日本のものと比較することで，日本よりも優れているところを学びとる。また，医療の枠を超えた，文化や歴史について，互いに学ぶ。

3. 活動内容

概要

このプログラムは、AMSA(Asian Medical Students' Association)が主催するAMSEP (Asian Medical Students' Program)という、アジアの医学部間での交換留学です。AMSEPのプログラム内容は、臨床実習か pre-clinical の実習かの別を問わず、5日から10日の期間の留学および相手国からの医学生の受け入れの2つとなっております。

今回、私たちは12月21日から26日までの期間で台湾の国立陽明大学に留学しました。そこで、研究室訪問、病院見学、現地の医学生とのディスカッション、そして台湾の文化施設の見学を行いました。なお、2020年2月10日から16日までの期間で私たちが国立陽明大学の医学生を受け入れます。

アカデミック研修

＜陽明大學 神經科學研究所・微生物及免疫學研究所＞

陽明大学の研究所を訪問させていただいた。神経科學研究所では、ラットに電極を埋め込み、解析することで、脳のある細胞に発現する特異的なマーカーを見つける研究をしていました。



↑ 神經科學研究所でのポスター

微生物及免疫學研究所では、免疫の大まかな仕組みとこの研究室でメインに行われている、テニス肘などの外傷から、自己免疫疾患が起こる機序についてのレクチャーを受けました。私が阪大で免疫の教室で研究させていただいることもあり、ここが一番興味を惹かれました。研究室では、FCM が数台置いてありました。しかし、三色までしか染色できない古いものが多い印象で、やはり、阪大の方が、免疫研究では設備が整っており、恵まれていると感じました。

<台北榮民總醫院（臺北榮民總醫院）>

陽明大学に付属している病院に訪問させていただきました。ただ、病院を見学がメインではなく、中華骨髓移植關懷協會（Taiwan Blood and Marrow Transplant Care Association）という NGO 団体が行っている、クリスマスのチャリティイベントのお手伝いがメインでした。サンタの衣装を着て患者さんの病室を回り励ますというイベントでした。言語の壁はありましたが、喜んでくれた患者さん方もいて、やってよかったと思っています。



↑台北榮民總醫院での中華骨髓移植關懷協會の方達との集合写真

<陽明大學附設醫院>

陽明大学からは少し離れた地方にある病院でした。地方にあるということもあり、高齢者に対する医療に重点をおいておりました。そこで勤務する先生から、陽明大學附設醫院が行っている、高齢者がフレイル状態にならないための取り組みをプレゼンしていただきました。台湾も日本と同様に少子高齢化が問題となっており、日本の寝たきり問題と同様のことが起こっているそうです。それに対して、陽明大學附設醫院では、病院内に筋肉トレーニングの機械が多く設置されており、高齢者の方々に使っていただいているようでした。ただ、実際にそれが高齢者のフレイル防止に効果があるのかはまだ検証段階のようでした。

<東洋医学>

吳大鵬 (Ta-Peng Wu) 醫師に東洋医学である針治療のレクチャーをしていただきました。実際に頭に針を刺したり、脈からその人の健康状態を読み取るなど、いま実践的に学ぶこと

ができたので大変興味深くありました。



↑実際に頭に針を刺している様子。

文化研修

＜瑞芳老街、金瓜石鉱山、九份＞

廃鉱山である金瓜石鉱山を見学しました。実際に鉱山の中に入ることができ、当時の人々の採掘環境を肌で感じることができました。



↑坑道の様子

また、日本でも千と千尋の神隠しで有名な九份にも訪れました。山間部にあることもあり、台北の都会的な雰囲気とは違いノスタルジックな場所でした。赤提灯が並んでおり、日本の

寺社の雰囲気と似ているように思いました。日本で似ているが少し違う、それが台湾の面白いところだと思います。



↑ 九份の様子

4. 成果

台湾の医療と日本の医療の違いを体感できました。特に興味深かったのが、日本では東洋医学というものがあるのに対して、台湾では針と言った東洋医学専門の教授が居て、アカデミックな活動をしていることです。さすが東洋医学の発祥の地であると感じました。また、文化面においても、建物など日本と似ている部分もありますが、装飾が派手であったり、原色が多い印象でした。総じて台湾の人々は日本人に比べて、陽気で感情表現が豊かでした。特に顔がよく動きます。これは見習うべき点だと感じました。ただ何よりも今回の成果は、台湾の同じ年代の医学生と交流を深められたことだと思います。狭い日本の医学界を飛び越えたつながりをもてたことは、国際感覚を持った人間になるために非常にためになるものだと思います。

5. 抱負

台湾の学生，先生方，そして何より岸本先生のご厚意によってこのプログラムに参加できたことを感謝しております。2月の受け入れでは，台湾の学生に日本の医療と文化を学び，何より日本を良い国だと思ってもらうために全力で取り組みたいと考えております。また，今回の経験を通して，広い視野を持った，世界で活躍できる医師になろうという決意が一層固まりました。

令和元年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 3年

学籍番号 *****

氏名 K・K

1. スケジュール

2019/12/21 関西国際空港発、台湾桃園国際空港着

2019/12/22 文化研修(猴硐(Hou-Tong)、九份(Jiufen))

2019/12/23 国立陽明大学(National Yang-Ming University(以下 NYMU とする))見学、ラボ見学(Neural Circuit, Inflammatory)、文化研修(龍山寺(Longshan Temple)、象山(Xiangshan))

2019/12/24 NGO 参加、文化研修(E7 play、culture night)

2019/12/25 病院見学、文化研修(宜蘭(Yilan)、礁溪温泉(Jiaoxi Hot Sparing)、寧夏路夜市(Ningxia Night Market))

2019/12/26 講義受講(Traditional Chinese Medicine)、文化研修(鶯歌(Yingge)、湯円(Tangyuan)作り体験)

2019/12/27 PBL、台湾桃園国際空港発、関西国際空港着

2. アカデミック研修

● 目的

台湾での医療現場や教育、設備を実際に生で見て、それを日本と比較することで日本の医療現場についてより深い評価ができるようになる。

● 内容、成果

今回免疫学と神経回路について研究している先生のラボを見学、東洋医学の講義を受けさせてもらった。また NYMU の附属病院の見学もさせてもらった。ラボの設備は阪大のものとあまり変わらなかったように思う。東洋医学の講義は日本であまり受けないのでとても興味深かった。鍼が治療になるメカニズムを教えてくださいました。鍼により筋肉が収縮するのでねんごの治療に使われているという話や、神経を刺激しエンドルフィンが脳内で分泌させて幸福感を得るという話であった。附属病院は Yilan という土地にありそこは台湾の中でも特に高齢化が激しい場所であるそうだ。そのため病院は予防医学を推し進めているという話であった。大学病院が急性疾患や治療の難しい病気の治療ではなく、日本の地域の市中病院がやるようなことをしているのは日本と異なる点だと思った。予防医学の一環としてフレイルの患者を増やさないように高齢者には体重、筋肉量、関節可動域、持久力や肺活量(スポーツテストのようなもの)を測定させ、筋トレマシーンを無料で貸し出していた。こ

のような取り組みは日本でも浸透させていくべきだと思った。また台湾では公園に筋トレマシーンが置いてあるのが普通であるらしい。

- 今後に向けて

日本で予防医学を浸透させていくにはどうすればよいか考えていきたい。

3. 文化研修

- 目的

日本と台湾の文化を比較して日本の文化をより客観視できるようになる。

- 内容、成果

亜熱帯な気候もあって、台湾の人たちは陽気な人が多いように感じた。表情豊かでしかめっ面や笑顔、悲しい顔などすべての感情がよく顔に出ていた。ジェスチャーもとても豊富だった。

台湾の温泉はとても新鮮であった。私が日本の温泉に慣れているからか日本の温泉のほうが好みだった。湯加減がぬるい(39℃)か熱い(43℃)かでちょうどいいというのがなかった。また露天風呂なものもあるかもしれないが水があまり清潔ではなかった。かけ湯の文化は台湾にも存在した。総じて日本の温泉のほうが好きだったが、台湾の温泉に入らなければ日本の良さに気づけなかったので良さを再確認するいい経験になったと思っている。

龍山寺はとても大きなお寺で 20 種類以上の神様、仏様がいた。中でも人が列をなして自分の参拝の順番を待っていたのが月下老人(縁結びの神様)であった。日本では一つの神社仏閣に一つの神様、仏様が一般的なので一つのお寺にたくさんの神様がいるのは新鮮であった。開運祈願で一つの神様が祀られていることはあっても、たくさんのそれぞれ担当する祈りの種類が違う神様がいて、ここに来れば何の祈願でもできるという神社仏閣は日本にはあまりないように思える。建物自体もとても大きく荘厳だった。

- 今後に向けて

日本にだけいると何が日本特有かなどがわからないので、これからも海外の人と触れ合い日本の文化の正しい理解を得られるようにする。

4. 総括

阪大の教務の方々や先生、台湾の学生や先生、そして岸本先生には大変感謝しております。本当にありがとうございました。この貴重な体験を糧にして視野の広い国際感覚のある医師を目指したいと思います。



平成 31 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実地報告書

医学部医学科 2 年

学籍番号 *****

氏名 O・R

以下では、表紙に記載した「3.今回の海外活動により得られた成果・感想等」に
次いで報告します。

1. スケジュール

2019/12/21 関西国際空港発、台湾国際桃園空港着→welcome party

12/22 文化研修(瑞芳老街、猫村、金瓜石鉱山、九份)

12/23 研究所見学→文化研修(龍山寺、西門町、象山)

12/24 NGO 活動→カルチャーナイト

12/25 病院見学→文化研修(足湯、夜市)

12/26 講義→文化研修(鶯歌陶器街、湯圓作り)

12/27 ディスカッション→farewell party→台湾国際桃園空港発、関西国際空港

着

2. 目的

まず、台湾の医学生と交流を深めることです。日本語が通じない相手と何日もかけてコミュニケーションを取るのは初めてだったので、気合を入れて臨みました。そして、彼らとの交流や台湾の医療現場、研究機関の見学を通して日本以外の医療について学ぶとともに、日本の医療について新たな視点で考え直すことです。

3. 活動内容-プログラムの詳細

(1) 研究所見学(12/23)

まず陽明大学神経科学研究所では、マウスを用いた運動学習などについて説明いただきながら、実際にマウスを飼育しているゲージや実験に用いるボックスなどを見せていただきました。

次に生物及免疫学研究所では、Szu-Ting Chen 先生に関節リウマチに関する

免疫についての講義をしていただいた後、実際に研究を行っているラボを見学させていただきました。2年の私は免疫学もラボもまだ触れていないので馴染みのないものばかりでしたが、先輩方は講義の内容も理解されており、またラボについても、阪大で見かけた機械があるとおっしゃっていました。

(2) NGO 活動(12/24)

台北榮民総医院にて、中華骨髓移植協会という NGO 団体の活動に参加しました。この日は、トナカイやサンタの格好をして病棟を巡って病室の患者さんにクッキーを配り、「きよしこの夜」や「ジングルベル」を歌いました。日本では病院は静粛にするところ、といったイメージですが、かなりの大所帯で練り歩き、また NGO の方々もどんどん病室に足を踏み入れ、看護師さんも止めるどころかカチューシャをつけていたりリズムに乗ったりしていて、ずいぶん日本の病院と雰囲気が違うのだなあと驚きました。衝撃的だったのは特別病棟です。生まれて初めて赴きましたが、廊下と病室が完全に隔絶されており、窓ガラス越しの面会でした。音声は壁についた電話を使って届けるのです。寝たきりの生活だからでしょうか、私たちの訪問をととても喜んで

くれたように見えました。ずっと手を振り続けてくれた患者さんや、ベッドの上に座ってニコニコとこちらを見ていた男の子の姿が目に焼き付いて離れません。ボランティア活動に全く縁遠かった私にとって、この活動に参加できたことは非常に貴重な経験となりました。



(3) 病院見学(12/25)

陽明大学附設病院を見学させていただきました。

まず、病院の役割や目標などについて先生方から伺いました。この病院は宜蘭地方の医療の中心として、医療サービスの提供、医師や医学生の育成、医療研究を行っています。ホームケアに力を入れているとのことでした。

講義のあと実際に病院内を見学させていただきました。身体能力をチェックするための部屋です。フローチャートに則って様々なテストを行い、身体状

態を把握するそうです。扉や仕切りはなく、一つの空間にいくつかのコーナーが設けられており、雰囲気としては中学校や高校の身体測定のような感じでした。日本のジムなどにもある、Inbody という体の組成を計測する機械もあり、何人かは体験させてもらっていました。

(4) 講義(12/26)

呉大鵬先生に、中国の伝統的な医学についての講義をしていただきました。実際に鍼を刺したりもしました。私は動脈の傍に刺すのをさせていただきましたが、うまくできて良かったです。舌の異変から体のどの部位に異常があるか分かるそうです。また先生は、私たちの脈拍から、健康状態や血液型、性格まで言及していて、すごいなあと思いました。



(5) ディスカッション

陽明大学の学生たちと、現在の医師の育成環境や、臓器移植について議論をしました。

(6) 文化研修

陽明大学の学生に案内いただいて、台湾の様々なところを巡り、いろんな視点から台湾の文化について学びました。実際に春巻きや湯圓を作るのも体験させていただきました。自分たちで旅行で台湾を訪れても、行かないだろう場所にもたくさん行き、大変貴重な経験となりました。



4. 抱負

このプログラムでは陽明大学の学生の方々をはじめ、阪大の先生や教務の方々などたくさんの方々に大変お世話になりました。奨学金をいただいたことにも大変感謝しています。

まずは台湾の学生を日本に受け入れる時、全力でもてなすこと。

そして、今回の貴重な経験を、医師を目指す過程で、また医師になってからも、生かしていけたらと思います。

2019 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 2 年

学籍番号 *****

T・M

渡航先国：台湾

受入機関：国立陽明大学

受入期間：令和元年 12 月 21 日～令和元年 12 月 27 日(7 日間)

以下、各日程での活動内容及び成果を報告いたします。

1 日目

移動及び宿へのチェックイン後、国立陽明大学での歓迎会を催してもらいました。飛行機内や空港では日本語による案内や標識も多くみられ、改めて台湾と日本との結びつきの強さを感じました。また、空港の広さや歓迎会でのピザのサイズなど、あらゆるものが大きい中国に近い台湾の国民性も体感しました。歓迎会ではお互いを知るために多くのゲームをしましたが、日本で有名なものとはまったく違ったゲームばかりで、文化の違いを感じました。さらに、1 日目で既に台湾人の英語や日本語への真摯な向き合い方と、日本人以上の上達を知りました。彼らは一人一人が英語名をもち、もちろん台湾の中でもかなり上位の学歴をもつ子たちというのもあったかもしれませんが、日本の学生に比べて堂々と英語や日本語を話す、あるいは話す努力をしているように見え、私自身己の英語力の拙さと学習の疎かさに恥じずにはいられませんでした。

2 日目

一日を通して文化研修でした。壮大な景色に恵まれた川にかかる橋では台湾の若者がよくポーズとして選ぶ六法星を 6 人で協力して写真にしました。他にも有名な猫村やかつて栄えた金鉱跡地、昔ながらの街並みにひっそりと残された古い会社跡、日本でもジブリアニメのモデルとなったとして有名な九份をまわりました。

台湾の街並みで気付いたこととしてはまず、すこし私の故郷でもある奄美大島に雰囲気似ているなということでした。かつての中継貿易地であり、さまざまな支配や文化が織り交ざったという点で、やはり島国なのだなと。また、出店がいたるところにあり多くの店が開放的で、ホールとキッチンが一体となった独特なつくりになっていました。もう一つ、総統選間近とはいえ。選挙ポスターの大きさとその数、そして多くの台湾学生が政治的意見をもっていることに驚き、この島の活

気を感じました。

3日目

午前は二つの研究室を案内してもらいました。まず Shih-Chieh Lin 先生の研究所ではマウスを用いた運動学習や、マーカーをつけたウイルスを投与し、関連する光依存チャンネルを恣意的に開閉することでウイルスの動向をみる実験内容について見学させていただきました。次に Szu-Ting Chen 先生の研究所では関節リウマチに関連する免疫について研究されているとのことでした。先生が阪大の先生方の名前をたくさんご存じで、阪大の免疫学研究について称賛してくださっていたのは誇らしく感じました。研究所は正直なところ阪大よりずっと広いだけでなく、中も整理されてきれいで、研究環境が整っていると感じました。

午後は文化研修で、まず龍山寺へ。ここもやはり広く、琉球王国の建物に似た色あいでした。台湾独特の参拝方法も学びました。夕方は西門町を散策しましたが、ここは新宿のような大都会で、日本でもよく見る企業が並んでいました。一番印象に残ったのは LGBT 向けの店や、それを思わせる道路などをよく見かけたことで、聞けば台湾は LGBT に対してかなり寛容で、昨年には西門町でも催しがあったとのことでした。日本では未だ LGBT に対する偏見が強い一方で、世界的には寛容になりつつあるため、これではどっちが進んだ国か分からないなと感じました。

4日目

午前は骨髄移植に関する活動を行う NGO 団体に参加しました。会長ご自身が子供時代に病気を患い、クリスマス気分よく過ごせなかった経験があり、入院患者の方々にもクリスマスを届けようではないか、というのがこの日の活動でした。サンタやトナカイの恰好をして病院をまわり、患者さんにプレゼントを渡したり歌を歌ったりと、素晴らしい活動でした。ただ感じた難しさとしては、涙を流して喜んでくださる方々もいる一方で、面会拒絶を頑なに通す方も少なからずいて、人それぞれの感じ方や価値観の違いを痛感しました。病気の苦しさからクリスマスを忘れていたかった方もいたかもしれないし、もしかすればご高齢の方の中には私たちが日本人と聞いて戦時中を思い出し、素直に喜べない方もいたかもしれない。将来医師になればこうした全ての方ときちんとコミュニケーションをとる必要があると思うと、学生生活から人との対話をもう少し考える余地があるなと思いました。

午後は文化研修で、まず日本のスポッチャのような施設で遊びました。日本と同じようなゲーム機もある一方で台湾特有のものもあり、面白く感じました。夜はプレゼンを介した文化交換会で、互いの代表的な食文化などを説明しあいました。

5日目

午前は国立陽明大学の附属病院で同病院が積極的に行っている治療法や自宅訪問型治療について説明をしていただきました。病院内の器具はいわゆる東洋医学的「切らない」ものが多いように感じました。体全体の調子や動き方から原因を探ろうとする姿勢を感じました。ここでは私が留学前から機会あればと狙っていたことを質問させていただきました。近年中国への遠慮から台湾を国として認識する国が減ってきており、物資の輸出入に少なからず影響がでることが予想されています。情報と医療物質の制御を中国が各国に圧力をかけた場合、それが実行されると原爆以上の効果をもたらしかねない。大国中国との向き合い方が近年の総統選の流れからも難しくなっていると客観視できるなかで、台湾の医師として現状に危機感ないしは不便を感じたことがあるか、という質問です。国際政治にも関心をもつ私としては少なくとも現場レベルの知識人からの一種の政治的「突き上げ」のようなものがあるか確認しておきたかったのですが、先生としては上の人間がやるべきことと現場の医療とは分けて考えているとのことでした。どの程度現場が本気で考えるべきか、今の香港の混沌を考えると正解は出せませんが、現地で知識人の考えに触れられるいい機会になりました。

午後は台湾の温泉に行きました。日本と違い入ったらすぐ湯船で、ロッカーもそこにあり、かつ屋外なのがメジャーとのことでした。洗い場はあるものの湯船の中は正直きれいとはいえず、失礼を承知で台湾人に日本の温泉の方がいいと言ったら、僕もそう思うと笑ってくれました。

6日目

午前には Ta-Peng Wu 先生による漢方の針治療や基本的なツボの知識の説明並びに実習がありました。初めて針を刺したり抜いたり動かしたりして新鮮でしたが、一番驚いたのは先生が脈拍だけで私たち一人一人の血液型や症状を見抜いていったことです。特に私は留学中のどの調子が悪かったのですが、私が一言も口を開いていないのにそれを見抜かれてしまい、漢方の凄さを痛感しました。実を言えば留学前まで、西洋医学の方が東洋医学より優れていると考えていました。しかしこの日の講義で考えを改めさせられ、日本でも東洋医学について学べる機会がないものかと、素直に思いました。

午後は陶磁器で有名な鶯歌という町を散策しました。名前のイメージ通り非常にのどかな町で、数多くの陶磁器や小物の店が並んでいました。夕食はディンタイフォンという台湾の高級料理店で小籠包などの台湾料理をいただきました。高級といっても、物価が安いうえに今は円が弱いので、私たちにとっては思っていた以上に安く感じ、何度でも食べに行きたく思えました。夜は宿で台湾の学生も呼んで遅くまで宴会をしました。最初はよそよそしかったのが、最後はここまで仲良くな

ったのかと思い、寂しさも感じました。

7日目

まずパネルディスカッションから最終日は始まりました。聞けば少なくともこの大学ではこうした形式の授業が多いとのことで、台湾の学生たちには、自らの意見を、それも英語で出すことにまったくためらいを感じませんでした。日本の奥ゆかしい文化も確かに大事ですが、それを言い訳にして「声」をもたせるような教育がないことも問題だと、異国の地で感じました。内容は予防接種を義務付ける必要があるか、台湾と日本の教育制度の違い、一般教養の授業は医学部生に必要なか、医師を志した理由と将来設計などについて話し合いました。

昼前くらいからお別れ会を催してもらいました。こんなに盛大に送り出してもらったのは初めてで、なかにはもう二度と会えないかもしれないような子たちもいると思うと、一期一会を大切にすることを学びました。

今後の抱負

まずなんといっても受けた恩は返さなければなりません。毎日夜遅くまで話し合い、多くの企画を練り上げてくれた国立陽明大学の学生たちが2月に大阪に来ます。私個人としても彼らの留学が実り多いものであるよう、全力でサポートしていきたいと思います。

また今回の留学で最も感じたのは英語力です。普段の生活に少しでも英語の学習を加えていかなければと感じました。

もう一つ、今後も積極的に海外に行きたいと感じました。やはり海外のことは海外でしか学べないし感じられません。自分の視野を広げ、引き出しを増やす意味でもこうした留学は大変意義があると感じました。

最後に

医学の知識もまだまだな世間知らずの私のため、今回奨学金を出していただけることになりました岸本先生に、この場を借りて御礼申し上げます。これからの医療界のため、日々精進してまいります。誠にありがとうございました。

2019 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 2 年

学籍番号:*****

氏名:N・K

渡航先国:台湾

受け入れ機関名:国立陽明大学

受け入れ期間:令和元年 12 月 21 日~27 日

1.スケジュール

2019 年 12 月 21 日 関西国際空港発、台湾桃園国際空港着
12 月 22 日 文化研修(Houtong Cat Village、新北市立黄金博物館、九份)
12 月 23 日 研究室訪問(Neural Circuits and Cognition Lab, Institute of clinical Medicine Lab)、文化研修(龍山寺、西門町)
12 月 24 日 Taiwan Blood and Marrow Transplant Care Association の NGO 活動に参加、台湾と日本それぞれの文化紹介プレゼン
12 月 25 日 国立陽明大学附属病院の見学、文化研修(宜蘭、礁溪、寧夏路夜市)
12 月 26 日 Ta-Peng Wu 教授による東洋医学の講義、文化研修(鶯歌)
12 月 27 日 パネルディスカッション(Problem Based Learning)、台湾桃園国際空港発、関西国際空港着

2.目的

- 台湾の医学生や医師と交流することで、日本と異なる環境での医療や文化を実際に見て学ぶ。
- 台湾の医学生がどのような環境でどのように医学を勉強しているのかを知り、日本の医学生と比較する。
- 台湾の医療体制を知り、日本と比較する。
- 台湾の医学生に日本の医療や文化を紹介し、お互いの医療と文化について話し合う。

3.活動内容

このプログラムについて(AMSA)

この活動は、AMSA(Asian Medical Student's Association)という国際的な医学生の団体の主催する AMSEP(Asian Medical Student's Program)というアジアの医学部間での交換留学です。AMSEP のプログラム内容は、臨床実習か pre-clinical の実習かの別を問わず、5 日から 10 日の期間の留学および相手国からの医学生の受け入れの 2 つとなっております。

活動内容の詳細

Houtong Cat Village(22 日)

炭鉱であったが今は使われなくなったところの横にあり、野生の猫がたくさんいる場所でした。ここでは猫を守るために市販の猫用の餌はあげることが禁じられていました。



新北市立黄金博物館(22 日)

台湾金属鉱業会社が事務所として建てた建物。建物内には金鉱脈発見の歴史や坑道の模型などがあり、また実物の金塊に触れられた。実際に過去に坑道として使われていた道に、働いていた様子を再現する模型などがある長いトンネルを通ることができた。

九份(22 日)

バスでずっと山を登った上にありました。日本でもかなり有名な九份ですが、歩くと日本人観光客が常に視界に入るほど多くいました。日本人と台湾人を顔で判別するのは難しく、ここでも日本人と台湾人の人種的な近さを感じました。屋台の店員は日本語を話せることが多々あり、物価は他の場所と比べ高く、聞くと観光客向けに高く設定している店が多いみたいでした。

研究室訪問 1(Neural Circuits and Cognition Lab)(23 日)

脳神経と報酬系の関連について研究しているラボでした。台湾の研究は日本に比べると劣るものなのかなと思っていましたが、このラボを見学して同じようなレベルで研究されていることに気づきました。研究の内容は阪大の北澤先生が行ったものとかかなり類似しており、実験対象がラットか猿かの違いこそあれ着眼点や実験手法など似ている点が多く驚きました。ちょうど生理学で講義を受けたばかりだったので英語で説明されても殆どが理解できました。またラボは建物の入り口からラボの中に至るまでずっと綺麗にされており、また廊下のホワイトボードを使って話し合いができるなど阪大も参考にできると思わ

れる点も少なからずありました。



研究室訪問 2(Institute of clinical Medicine Lab)(23 日)

スライドを用いて免疫学の講義を受けました。免疫学であったため 2 年の私はまだ知らない内容であり、英語の説明をされたときに単語の内容を予想して補うことが難しく、内容は完全には理解できませんでした。先ほどの研究室訪問とは大きく違い、内容を知らなければ英語ではほとんど理解できないことが悔しく思いました。専門用語が特にわからなく感じ、医学英語の重要性を痛感しました。

龍山寺(23 日)

台湾で最も有名な寺で、1738 年に中国人移住者を集めるために作られたそうです。何度か災害などに見舞われ、改築を繰り返したと聞きました。ここにはさまざまな神が祀られており、参拝者は自分の目的に合った神に対してお祈りします。日本では一つの場所でそんなに多くの神を祀るわけではないため、同じく仏教といえど日本と台湾では考え方が違うのだと実感しました。また独特なお祈りの仕方が存在し、日本とは違うルールが設けられていたりしました。



西門町(23 日)

台北の西側に位置する街で、19 世期の日本の浅草に宣伝手法を学んで作られたそうです。活気あふれる若者の街という印象を受けました。店が立ち並び、衣服や食べ物など様々な物が売られていました。ユニクロや GU といった日本でもあるようなチェーン店は物価が日本より高く感じ、台湾でしか見ないような店は物価が日本より安かったです。台湾独自の店などでは「一つ買えばもう一つ無料」といったセールが多く行われており、日本とは売り方が大きく違いました。

Taiwan Blood and Marrow Transplant Care Association の NGO 活動の参加(24 日)

病院で NGO の活動に参加させていただきました。血液や骨髄に関連した病気を患う患者が主でした。その日はクリスマスイブだったためサンタの衣装を数人が着て、全員で見舞いに行ってお菓子をあげて元気付けるということをしました。ただ、患者やその家族によってはあまり笑顔になってもらえないこともあり、NGO の方は終始笑顔でお見舞いをしておられましたが、私は途中から患者やその家族の苦労が少し分かるような気がしてとても心が苦しくなりました。それでも笑顔でいてくれと言われたのでなるべく元気な様子で務めました。治らない病気を患った人や治療のために外国から来た 5 歳ほどの子のこと忘れられません。



台湾と日本の文化紹介(24 日)

夜には台湾側と日本側で用意したスライドを用いた文化紹介が行われました。台湾の食文化や歴史など深く知ることができました。台湾人は外食が多く、家でご飯を作ることは日本人と比べると稀だと聞きました。そのため夜市が盛んであったり、朝にも屋台でご飯が売られているのかと納得しました。また、台湾で有名なパペットを一緒に作りました。互いの文化紹介とその後の自由に話せる時間でお互いの国のことについてより深く知ることができました。また、台湾人と話してきて台湾人は日本に比べ多くの人が海外に行っている印象があったのですが、台湾は土地が狭いため海外に留学したり旅行する人が多いのだと説明してくれる人がいました。台湾の若者は幼稚園の時から英語を習っており、中国語と英語はよく話せて、人によってはそれに加えて台湾語や日本語なども話せるものだと

聞きました。とてもグローバルな環境なのだと感心するとともに、日本の英語教育は台湾のようにもっと幼い頃から英語話して聞けるように教育すべきなのではないかとかんじました。

国際陽明大学附属病院の見学(25 日)

台東にある病院まで行き、病院に勤務する方々のお話を聞き、その後病院内を見学させていただきました。この病院はかなり地方にあるため地方にある病院だからこその課題や問題があり、それを解決するために実際に行なっていることを聞きました。車などで医者が患者の家まで訪問したり診察患者の受付のシステムを工夫したりしていると話していました。地方にあり先日に行った病院に比べ小規模な病院でしたが、中は綺麗で広く、またリハビリのスペースがかなり広く作られていました。毎日多くの人をそのリハビリスペースでリハビリさせているらしいです。年配の方が多く来られる病院ゆえの特徴だなと思いました。

寧夏路夜市(25 日)

日本でも有名な夜市に行きました。夜市は人がかなり多く、歩くのも苦勞するほどでした。ここでは観光客だけでなく多くの台湾人も来るらしく、物価は安く、様々な物が売られていました。有名な店があり、日本でもなかなか見られない長さの列で待つ人々がいました。台湾人は列で待っているのを見ると並びたくなると話す人がいました。国によっては並ぶくらいなら他の店を選ぶと聞くのに、台湾人は日本人と似ているなと思いました。台湾人は先ほど述べたとおり外食することが多いゆえに夜市がここまで発達しているのだろうと思いました。

Ta-Peng Wu 教授による東洋医学の講義(26 日)

針治療ができる先生の東洋医学に関する話でした。治療法やメカニズムについていろいろと聞くことができました。今学んでいる西洋医学とはかなり違ったもので、「氣」など独特な内容も多くあり興味深かったです。先生が針を用いて実践して下さったり、私たちも少しだけ針を使って実践させていただいたりしました。講義の仕方がとてもおもしろく、話を聞くだけの日本の講義とは違い最後までずっと楽しんで聞くことができました。抑揚がある授業をされる先生で、より深く知りたいと自然と思わせる先生でした。また教授自身も内容を話すのが楽しくてたまらないというような様子でした。台湾の教授はこういった授業をされるのかと思うと、日本も見習うべきだと感じました。

鶯歌(26 日)

台東にある観光向けの街でした。陶器が有名などころらしく、陶器を用いた置物や楽器などが多く見られました。

パネルディスカッション(PBL)(27日)

台湾の学生を交えてパネルディスカッションをしました。台湾ではPBLが授業でもあるらしく、発言することにまったく躊躇いがなく活発に話していました。日本人は台湾人と比べると発言をあまりしないように思われました。台湾では学生でもどんどん話し合いに参加して意見を交わしている現状を見ると、社会に出たときに大きく差があるなと感じました。日本でもこのような話し合いをするという授業や機会が設けられてもいいのではないかと思います。話し合いの場ではっきりと自分の意見を言うということを学生のうちにしていることは大いにアドバンテージだと思いました。

最後に

見える世界が広がるはずだと信じてこの AMSA というプログラムに参加して、実際に交換留学を終えてみると、本当に今まで見えていなかった世界が少し見えるようになり考え方も大きく変わったと感じます。この留学は今まで AMSA を続けてくださった先輩方や、阪大や台湾の先生方、台湾の学生たちに大いに助けられて実現しました。また金銭面で多大な支援をして下さった岸本先生のおかげで学生ながらも海外で学ぶ機会を得ることができました。私たちのために、多くの時間とお金を割いてくれた台湾の学生が2月に日本に留学に来ます。その時は必ず良い経験をしたと思ってもらえるように全力で受け入れに当たりたいと思います。今後も様々なところに実際に行って、多くの人と交流し、広い視野と様々な考え方ができる人間になれるよう努力していきます。

令和元年度
岸本国際交流奨学金による
海外活動実施報告書

医学部医学科 2 年

***** Y・G

○大まかなスケジュール

(詳細は後述する)

12/21	関西国際空港発／台湾桃園国際空港着→歓迎会
12/22	文化研修（瑞芳老街、九份周辺）
12/23	研究所訪問（陽明大學 神経科学研究所・微生物及免疫学研究所） →文化研修（龍山寺、西門町）
12/24	臺北榮民總醫院にて NGO 活動に参加（中華骨髓移植關懷協會）→ 文化交流会
12/25	陽明大學附設醫院を見学→文化研修（寧夏夜市）
12/26	吳大鵬（Ta-Peng Wu）醫師による講演→文化研修（鶯歌陶器街）
12/27	送別会→台湾桃園国際空港発／関西国際空港着

○目的

台湾の医学生や医師、またそこに生きる人々と接することで、言語を超えて友好を深め、ひいては様々な面における国際感覚を養うことや、台湾の文化を知り、自国の文化を外側から客観視することで今までの人生になかった新たな知見を得ること、また様々な交流を通して、台湾の学生にも私たちの国の医療や独自の文化を知ってもらい、意見を交換すること。

加えて、大阪大学と国立陽明大学との交換留学の歴史を引き継ぎ、成功させることで、この2校の友好関係、ひいては日本と中華民国の友好関係に貢献することである。

○活動内容

- ・プログラムの概要

このプログラムは、AMSA(Asian Medical Students' Association)という国際的な医学生
の団体の主催する AMSEP (Asian Medical Students' Program)という、アジアの医学部
間での交換留学である。AMSEP のプログラム内容は、臨床実習か pre-clinical の実習
かの別を問わず、5 日～10 日の期間の留学および相手国からの医学生の受け入れの
2 つとなっている。

今回、私たちは 12 月 21 日から 27 日までの期間で台湾の国立陽明大学に留学しまし
た。そこで、研究室訪問、病院見学、現地の医学生とのディスカッション、そして
台湾の文化施設の見学を行った。なお、2018 年 2 月 10 日から 16 日までの期間で今
度は我々阪大医学部生が国立陽明大学の医学生を受け入れる予定である。

・プログラムの詳しい内容と所感

1 日目 歓迎会

交友を深めるためのアイスブレイクや、バンド演奏、マジックショーなど、大勢の
学生たちがもてなしてくれて、とても嬉しく思うと同時に、見ず知らずの外国人で
ある我々に対しここまでの歓迎をしてくれることに感動した。



歓迎会後の集合写真

2 日目 文化研修

九份の周辺の文化施設を様々に巡った。中でも猴硐地区は、別名「猫村」と呼ば
れ、野生の猫が大量に生息していることで有名な場所である。この場所が個人的に
は最も印象に深く残った。また晩には台湾の観光地として世界的に著名な九份夜市
に連れて行ってもらえ、幻想的な異国情緒をしかと味わった。



このように土産屋の中にも普通に猫が寝ている

3日目 研究室訪問

陽明大學 神經科學研究所・微生物及免疫學研究所の二つの研究所にお邪魔させていただき、それぞれで教授（助教授）に講演をしていただいた。

まず神経科学研究所であるが、こちらでは現在「光遺伝学」というやや特殊な分野の研究に力を入れているらしかった。まだマウスでの実験段階ではあるが、脳の神経細胞の特定の領域にマイクロインジェクションによりある種のウイルスを注入し、これの持つ逆転写の働きで、脳細胞のゲノムの特定の配列が逆位となり、その影響で、ウイルスに感染した細胞で特異的にあるタンパク質が発現し、これに蛍光を照射することで、特定の神経細胞だけを活性化できるという仕組みであった。非常にユニークな方法で脳細胞のグルーピングを行っており、脳機能の解明を一段と早めるような手法だと感じた。

このような研究所には、台湾の医学生が1回生のうちから（学年の半分ほどが）なんらかの形で属し、最先端の研究に生身で触れていると聞き、台湾の医学生の研究分野への興味の深さに圧倒された。

またその次に、微生物及免疫学研究所の先生に講演をしていただいた。年末の貴重なお時間を割いて、英語で最先端の免疫研究に関する講義をしてくださり、とても良い経験となった。ただ、免疫学は3年次で履修する分野につき、理解が足りない部分が間々あったことは悔やむべき事実である。一刻も早く免疫学の勉強を始めたと思わざるを得なかった。



光遺伝学研究室の活動概要

3日目 文化研修

龍山寺という台湾でも著名な寺院に連れて行ってもらった。そこでは、神に願いをするにあたっての儀式として「表裏の別のある、赤い左右対称の木片を2つ同時に足元に放り、表裏が1つずつ出れば願いが叶う、両方ともが表なら願いが叶わぬ、

両方とも裏ならもう一度放る」といった具合の、おまじないのようなものを体験した。ちなみに3回投げて3回とも表裏1つずつ出た。また、この時神に祈りを捧げる際に「自分の氏名・生年月日・住所」を心の中で唱えなければならないと聞いた。こういうところにも、日本人が海外諸国と比較して「自己」の意識が希薄であることが思い出された。

4日目 臺北榮民總醫院でのNGO活動（中華骨髓移植關懷協會）参加

台北随一の総合病院であるこの病院には非常に重度の白血球患者も入院しており、そのような患者さんたちを元気付けるために、白血病治療の関係者と「元白血病患者」で構成されるNGO団体が結成された。この団体が、毎年クリスマスにはサンタのコスチュームを着て患者さんにお菓子を配り元気づける、というイベントを行っており、これに参加させてもらった。我々のメンバーの中で、3回生である二人（酒井さんと小原さん）がサンタの全身コスチュームを身につけ、あとのメンバーは帽子などのアイテムを付けて、鈴を鳴らしながら各病棟を回った。重度の白血病の患者さんは、完治しない限りはずっと無菌室での生活になる。面白くない毎日に、そのようなイベントをすることで、多少なりとも喜んでもらえたかと思う。病院実習までは、実際に入院している患者さんと触れ合うことはほとんど無いので、貴重な体験となった。

4日目 文化研修

台湾の文化と日本の文化をお互いにプレゼンテーション形式で発表しあった。台湾の文化の中で、食文化の占める割合は比較的に大きく、台湾料理はその確かな独自性により世界に名を轟かせていることを改めて実感した。また、台湾の中でも台北と台南では味付けに様々な面で差があるというような、台湾の風土も面白く学べた。その後、台湾の伝統的な人形劇である「布袋戯」を模した紙人形を作る体験をさせてもらった。こちらも興味深く、日本でいうところの人形浄瑠璃に似たものであるように思えた。両文化の成立に共通点などはあるのだろうかと思わずにはいられなかった。

5日目 陽明大學附設醫院大学見学

大学病院を見学した。阪大病院よりも規模は少し大きい。常に人でごった返している総合受付はなく、各科で完全に機能面で分離しており、混雑した場所は一切見受けられなかった。病院に訪れるさまざまな種類の人間それぞれの立場を考慮し、その上で機能性を重視した作りになっているのを感じた。

5日目 文化研修

台湾で最も規模の大きい夜市の一つである、寧夏夜市に連れて行ってもらった。非常に多くの人々がごった返す中に、様々な台湾のファストフードを売る出店が乱立しており、活気にあふれていた。色々な台湾特有の料理・ホットスナックを食べる事が出来たが、最も印象に残ったのは、鴨の咽頭部の串焼きであった。日本では到底見る事の出来ない、一見グロテスクなホットスナックだったが、味はとても美味しく何本でも食べたくなるようなものだった。

6日目 吳大鵬 (Ta-Peng Wu) 醫師による講義

非常に興味深い講義だった。吳先生は、人体に鍼を刺すとき、どのようにさせばどのような効果があるかを、その大まかな仕組み共に解説してくださったのだが、それだけではなく、東洋医学において、脈拍から何がわかるか、呼吸の様子から何がわかるかなどを私たち生徒の体を実際に診察しながら教えてくださった。数日前から風邪気味で喉がガラガラだったメンバーの体調を、脈拍だけで（そのメンバーは声を発していない）言い当てた時はとても驚いた。分子構造の解析が大前提の西洋医学とは全く異なるアプローチの医学を肌で学べて、貴重な体験となった。

6日目 文化研修

鼎泰豊という台湾で最も著名な中華料理店に連れて行ってもらった。ここでは、夜市での食事とはまた違った、高貴な雰囲気の中華料理を楽しむことができた。

7日目 PBL (Problem-based learning)

PBLとは、複数人のグループで、問題提起しそれに対して皆で意見を様々に言い合って、議論をしながら解決方法を模索するという学びの形式である。日本でいうところの「ディスカッション」のようなものだ。陽明大学では、入学当初からこの形式の授業があるらしく、もちろん使用言語は英語である。これに参加してみて初めて、専門分野において自らの意見を構築すること、さらにそれを他者が納得する形で英語で言葉にすることの難しさを実感した。日本と海外の医学教育の差に愕然とした瞬間のひとつである。

7日目 送別会

向こうの AMSEP メンバーたちは、歓迎会の時よりもさらに手のこんだ楽しい企画をいくつも考えてくれた。また、この7日間を振り返るビデオを作ってくれ、それを見ながら本当に温かに迎え入れてくれたことを色々な思い出と共に思い返してい

た。またバンドの演奏に、日本のメンバーが涙するシーンもあった。最後に皆で名残を惜しみながら写真を撮って、台湾での交換留学は幕を閉じた。



7日間受け入れてくれたメンバーと共に

〇総括

この7日間、台湾のメンバーのおもてなし力に感心しなかった日はなく、また台湾での教育の高さに驚愕しない日もなかった。本当に有意義で充実した7日間であった。このようなプログラムに行く機会を与えてくださった岸本国際交流奨学金機構には、深く感謝している。またこのプログラムでは、阪大の教務の方々、台湾の学生、先生、病院の先生方、そしてホステルのスタッフの方々など本当に多くの方に大変お世話になった。そのお返しの意味も込めて、日本での受け入れに全力を尽くしたいと思う。さらに、次回以降の様々な国政交流プログラムにも協力することで、機構への恩を返していきたいと思う。そして私自身は将来、このプログラムで学んだことを存分に活かして、視野の広い、世界で活躍できる立派な医者になろうと決意した。

令和1年度令和1年度岸本国際奨学金による台湾留学活動報告書

医学部医学科一年

M・Y

1. 活動スケジュール

詳細については、3.活動の詳細にて記載致します。

12月21日: 文化研修

12月22日: 文化研修

12月23日: 研究室見学、文化研修

12月24日: NGOの活動に参加、文化研修

12月25日: 病院見学、文化研修

12月26日: 大学講義に参加、文化研修

12月27日: パネルディスカッション、文化研修

2. 活動の目的

まず、台湾の医学生や医師と接することで友好を深め、そして国際感覚を養うことです。そして、台湾の医療や文化を知り、それを日本のものと比較することです。さらに、交流を通して台湾の学生にも日本の文化を知ってもらうことです。

3. 活動の詳細

このプログラムは、AMSA(Asian Medical Students' Association)という国際的な医学生の団体の主催する AMSEP (Asian Medical Students' Program)という、アジアの医学部間での交換留学です。AMSEP のプログラム内容は、臨床実習か pre-clinical の実習かの別を問わず、5日から10日の期間の留学および相手国からの医学生の受け入れの2つとなっております。

今回、私たちは2019年12月21日から27日までの期間で台湾の国立陽明大学に留学しました。そこで、講義の受講、病院の見学、臨床的な実習を行い、そして台湾の文化施設の見学も行いました。なお、2019年2月10日から16日までの期間で私たちがI陽明大学の医学生を受け入れます。

活動について

12月21日

空港に到着し、ウェルカムパーティに参加しました。ウェルカムパーティでは、台湾ではアイスブレイキングとしてよく遊ばれるリーダーを探すゲームをしたり、体を動かすゲーム

をしたりして、陽明大学の生徒達と仲良くなることができました。また、一緒に食事をして話していく中で台湾の文化について少しわかってきました。日本人8人に対して台湾の生徒は30人ほど参加して下さって嬉しかったです。

12月22日

文化研修の日でした。午前中は新北市立黄金博物館を訪れました。この中の黄金館と本山五坑を見学しました。黄金館では新北市北部の水金九地区の工業に関する人文、文化や自然生態等が展示されており、ギネスブックに展示されたこともある220キロの金塊も展示されていました。また、夜には宮崎駿監督の千と千尋の神隠しの舞台である九份を訪問しました。こちらは観光地であり、たくさんの言語が聞こえてきました。しかし、観光地であっても、台湾人と訪れることで、おすすめのお店を教えてもらえることはもちろん、建造物や食べ物についての細かいことを知ることができたり、日本人だけで来るのとは違う視点を持つことができました。

12月23日

午前中は陽明大学の研究室に訪問しました。神経回路と認識を研究する研究室に行きました。この研究室でマウスが光を見てから決められた行動をする時の脳波を調べます。マウスを脱水状態にしておき複数の電極をマウスの頭部に装着し、ライトが光る→マウス自身が入れられた箱の四隅に鼻をタッチする→箱の側面にある穴に鼻を入れる→端の穴からご褒美の水がでる、という流れを繰り返す実験を見学しました。ネズミの脳のごく小さな領域内にウイルスを注射し、そのウイルスの逆転写酵素（RNAからDNAを作成するもの）によって、Creという遺伝子をマウスのDNA上に組み込み、これが産生する酵素が蛍光色を当てることにより活性化する。活性化すると特定のDNA領域に作用して、その領域の向きを逆転させて特定のたんぱく質が発現する、ということを学びました。一回生の私にはかなり難しい内容だったのですが、今後の医学の学習に向けて医学に触れる良い機会となりました。

午後は龍山寺を訪れました。龍山寺は1738年に建てられた台湾で最も有名なお寺です。本殿には、8頭の龍が螺旋状に32組の層をなして輪廻を象徴している円形天井があり、一本の釘も使われていないこの匠の技は、国宝にも指定されています。朱色や金色、銀色などがたくさん使われており、とても鮮やかでした。

夜は象山に登り、台湾の夜の街を山頂から見て、とても綺麗でした。

12月24日

台北榮民總醫院（臺北榮民總醫院）にて、中華骨髓移植關懷協會の活動に参加しました。この協会は日本骨髓バンクから運営の仕組みを学んだ後に設立された非営利団体です。クリスマスイブということで、サンタクロースの格好をして、クリスマスプレゼントであるキャンディーを持って病棟内をまわりました。無菌室内の患者様には電話を通してクリスマスソングを歌ったり、励ましの言葉をかけたりした。台湾で最も自殺者数が多い日であるクリスマスイブの日にこのイベントを行うことで患者さんに元気を与えることを目的とした活動です。この活動には実際に治療を受けて回復した人や病院で働く医師や看護師が参加しており、共に病棟内をまわりました。

その後、陽明大学の学生たちと culture party を開き、日本の文化を紹介するプレゼンを行い、台湾の文化を実際に体験したりしました。

12月25日

2時間ほどプレゼンにて陽明大學附設醫院の紹介をして頂いた後、実際に見学しました。地域医療を担当する先生に病院を紹介して頂き、主に高齢者の身体検査を見学した。2分間歩き続けられるかや、足の柔軟性はどうかなどを調べ、身体能力を総合的に判断する方法を見学しました。

主に高齢者の身体検査を見学し、InBody という体成分分析装置を用いたり、2分間歩き続けられるかを測定したり、柔軟性を測ったりして、体の身体能力を総合的に判断する方法を学びました。

12月26日

国立陽明大学にて伝統的な中国医学についての講義を受けました。講師は To-Peng Wo 先生であり、主に針灸やツボについて学びました。実際に先生の頭や手首、膝などに針をうたせていただき、どのような動かし方をすればどのような効果があるのかを学びました。針をどちらに折るかで効果が現れる場所が大きく違うのがとても驚きでした。先生の口から与えられた刺激の様子を聞くことによって患者にどのように感じられるのかを知れて良かったです。膝に打った一本の針が膝下からつま先にかけて各部位を意図的に狙って刺激できることや、胃腸に刺激を与える方法もあることを知り、非常に興味深かったです。また、手首に打った針は静脈に接しており、拍動とともに針が上下に動くのを観察できました。また、自分の脈を自分でとる際には、片方の腕をもう片方の手の甲側にまわして手首の裏側から人差し指と中指をだすとすぐに血管の位置がわかり、計測しやすいと教えてもらえたことは大きな収穫でした。

12月27日

最終日はパネルディスカッションをしました。テーマは、政府は国民に予防接種を義務付けるべきか、予防接種は医療従事者に優先的に使うべきか、大学の一般教養は必要か、など、医学的なものもそうでないものもありました。自分の意見を英語で表現して議論するのは難しいものでしたが、台湾の生徒の意見をたくさん聞くことができ、視野が広がったと思います。

その後フェアエルパーティに参加し、お別れをしました。短い間でしたが、台湾の生徒達と交流を深められた1週間だったことを実感しました。

この7日間、毎日のはじめての体験で、日本では経験できないことをたくさん経験することができました。講義の中では、正直1回生の私には理解が難しい部分が出てくることがありましたが、台湾の生徒がわかりやすい英語や図を使って説明してくれたり、先輩方が日本語で教えてくれたりして助けてくださったらおかげで少し理解を深めることができ、感謝しています。

このプログラムでは、岸本奨学金の関係者の皆様、阪大の教務の方々や先生、台湾の学生、先生に大変お世話になりました。受け入れをしてくれた学生は、病院や様々な施設に時間とお金を使って連れて行ってくれ、英語でわかりやすく説明してくれました。また、病院では、多くの先生にわざわざ時間を割いて、案内や説明をしていただきました。今後、私はまずは今回受け入れてくれた学生を2月に日本に受け入れることに全力を尽くしたいと思います。さらに、次回以降のプログラムにも協力することで、恩を返していきたいと思います。そして私自身は将来、ここで学んだことを活かして、視野の広い、世界で活躍できる医者になりたいと思いました。